韓国における仏教受容と民族信仰　その一

――仏教と穀霊問題――

申　賢　淑

一

古代韓民族には様々な民族信仰があつた。これらの思想が仏教受容以後、どのように韓国の仏教に影響を与え、とり入れられ、仏教と融合同化して、今日の韓国の社会においてどのように定着したか、について考察してみたい。民族信仰と仏教受容との問題点については数多く指摘される所であるが、とくにその中で、人間の主食である穀物の神を崇拝する信仰である穀霊神信仰と仏教受容の問題を中心としてその所見を述べてみたいとおもう。

二

穀霊神の崇拝信仰は三国（新羅・高句麗・百済）が建国される以前から韓民族にあつた。この穀霊神の崇拝信仰は三国の建国にその影響を与え、高句麗始祖の神話も新羅始祖神話も穀霊神信仰を示すものであるが、この二つの神話は同じく、穀霊神崇拝にもとづいていながらもその崇拝思想の顕われ方が異なる点で注目してみたい。この点については『三国史記』巻一、巻十三、『三国遺事』巻一等の説の如く、高句麗始祖神話説では熊が呪術と修行によつて人間となり、天神の子を生むというシャーマニズム信仰的伝承をのこしている。この熊の伝説にあらわれた母神「河伯」の女神を始祖神として国家的に祭祀し、十月の収獲祭等に母穀神として崇拝したのである。（『魏志』の東夷伝・『北史』高句麗伝・『高麗図経』巻十七）

女神崇拝思想は万物を生むという種子繁植を意味する穀霊神崇拝思想に反映して、新羅始祖神話説では、天から一個の紫の卵が降臨し、その卵から王が生まれ、鶏竜の左脇から王后が生まれたという。天から降臨するものが新羅始祖王であり、王后は水神の娘で、太陽と水とを必須条件とする農耕生産にはもつともふさわしい神話といえる。

穀霊神崇拝からおこつた始祖伝説は高句麗と新羅は同じであるが、高句麗では熊の伝説から生れた母神の神話をつくりだし、新羅では太陽と水の神話が生まれたことが両者の相違点であるといえる。

三

高麗始祖王建（八七七～九四三）は仏教信仰が厚く、元年（九一八）に八関会を設け、国家の年例行事としてこれがおこなわれた。八関会は王建が新たに設けたのではなく、新羅真興王三十三年（五七二）に設けられたものを継承した事はいうまでもない。

八関会を新羅真興王が設けた意図は『三国史記』巻四に、

「冬十月二十日、為二戦死士卒一。設八関筵会於レ外寺。七日罷。」

と記されているが、八戒を受持し、その功徳で人間に害をあたえようとする悪鬼・雑神等を仏門に帰依させ涅槃を証得させるという

意義であったが、高麗・王建はその意義を十訓要第六条に、

「八関所㆓以事㆓天霊及五嶽名山大川竜神㆒也。」

とのべている。この八関会は国家的祭典として、酒・多果・音楽・舞等で鬼神を喜ばさせ、天神のために慰舞し国家と王家の太平・幸福を祈ったのである。当時、この八関会の儀式を見た宋の使臣徐兢は『高麗図経』巻十七に、

「以㆓十月㆒祭㆑天大会、名曰㆓東盟㆒、其国東有㆑穴、号㆓稼神㆒。亦以㆓十月㆒迎而祭㆑之。自㆓王氏有㆑国以来、……其十月東盟之会、今則以㆓其月望日㆒具㆓素饌㆒、謂㆓之八関斉㆒。礼儀極盛……東神祠、在㆓宣仁門内㆒、地稍平広殿宇卑陋、廊廡三十間、荒涼不㆑茸。正殿榜曰㆓東神聖母之堂㆒、以㆓幕帟㆒蔽㆑之、不㆑令㆓人見㆓神像㆒、蓋刻㆑木作㆓女人状㆒。或云乃夫餘河神女也。以㆓其生㆓朱蒙㆒、為㆓高麗始祖㆒、故祠㆑之」

といっている。高麗の八関会は『魏志』東夷伝等の文献に記されている古代韓民族の中でおこなわれた十月祭天大会の内容と意義を源泉とするものであることがわかる。さらに高麗の王都に朱蒙（高句麗始祖東明聖王）と母神をまつる東神祠が建てられたことによって、高麗の八関斉が穀霊神信仰を強く示しており、八関斉が国家の豊作と安全を祈ったことがわかる。高麗の八関会は新羅のそれと異なる思想を示し、『中阿含経』巻五五・『大智度論』巻十三等の八戒受持功徳説を根本思想とする仏教儀式であるが、古代韓民族の中でおこなわれた民俗信仰は消えることなく、高麗の八関会にも穀霊信仰が生きていることがわかるのである。

四

施餓鬼の儀礼は、目蓮尊者の母を餓鬼道から救う為に説かれた『盂蘭盆経』の説相が中国人の宗教的感情に契合した結果と見られるが、明の雲棲袾宏は施餓鬼行事（盂蘭盆供養）について、寺院では百種の供物を三宝に供えて、その威を請えば七世の父母を救ひ得ると書かれており（『正訛集』）、この法会は後世になると寺院のみでなく、民俗行事の中にも消化されるが、この行事は現在韓国の寺院でも旧歴七月十五日に盛大におこなわれている。この行事の名を盂蘭盆会とも、施餓鬼ともいわず一般には「百中仏供」・「百種仏供」と呼んでいる。この呼び名は、「百中日」・「百種日」といって、旧歴七月十五日に百種類の食べ物と百種類の種（種子）を神の祭壇に祭り、盛大な祭つりをおこなった風俗行事があった。この風俗的行事は『魏志』韓伝に見られる五月下種時の神祭と、『三国史記』の「祭祀志」に見られる先農・中農・後農の祭礼があったが、これらの風俗が中国の中元の思想と合流し、百種日の風俗的行事がおこなわれ、さらに盂蘭盆行事の施餓鬼儀式と融合され、施餓鬼の行事を「百中仏供」・「百種仏供」といったものと思われる。

五

以上のべたことによって明らかなように、古代韓国の穀霊信仰は三国建国神話にも大きな影響を与え、さらに仏教伝来以後、仏教行事の中にも穀霊信仰の影響を指摘することができ、また穀霊信仰の跡を見ることができる。仏教が韓国社会に定着するためには、民族信仰である穀霊信仰を摂取し、融合することが必要であったことが以上の所論によって明らかであると思う。

（細註略）